ジオグラフィカ千里　第 1 号（2019）31-49

世界を把握するための時間と空間のスケールについて
－世界システム論，グローバル・ヒストリー，ワールド・ヒストリーの展開から－

吉　田　雄　介*

摘要

イマニュエル・ウォーラーステインの世界システム論から多大な影響を受けたグローバル・ヒストリー研究やワールド・ヒストリー研究が，過去十年ほどの間に著しい発展をみせている。そして，グローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーの分野では，空間や地域に関連する諸概念が重要度と影響力を増し，その概念の解釈を発展させたり，空間に関連する用語の使用が激増している。これが人文科学・社会科学の分野での空間論的転回や空間論的革命の結果であることは明らかである。ただし，グローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーで使用される空間や地域に関わる用語の使用には，若干の問題があるように思う。そこで，本稿では，世界システム論やグローバル・ヒストリー，ワールド・ヒストリーの分野での，空間に関する用語の最近の解釈と使用について検討する。

キーワード：世界システム論，ワールド・ヒストリー，グローバル・ヒストリー，空間，地域，空間論的転回

Ⅰ　はじめに

1. 問題意識

本稿の課題は，グローバル・ヒストリーないしワールド・ヒストリーと呼ばれる研究分野での空間やスケールの扱いについて整理・検討をおこなうことにある。近年，世界システム論を踏まえて，グローバル・ヒストリーあるいはワールド・ヒストリーという考え方が歴史学の分野を中心に着実に浸透しつつある。後述するように，これらは空間的・地理的な用語を多用しており，地理学になじみのこうした概念にも新たな知見を提示する可能性がある。

ここでの問題関心は実は個人的なものに由来する。筆者は，イランの手織物産地を研究している。フィールドに立つと，手間ばかりかかるだけで儲かりもしない小商いがなぜ続いているのか一見すると理解に苦しむことが多い。最初は途方に暮れても，仔細に産地を知れば，その残存は，一面では個人の努力の成果であり，他面では産地としての地域的・歴史的背景の賜物であることがわかる。ともすれば目の前の小さな岩を乗り越えることに汲々としてしまいがちである

*神戸学院大学・非常勤講師　　E-mail : sharare@human.kobegakuin.ac.jp

が，自分一人で見て聞いて歩き回ることのできる小さなフィールドをより広い時空間に位置づける必要性を切実に感じる。

こうした個人的な経験を，世界的な碩学の事例と比べることはおこがましいが，イマニュエル・ウォーラーステイン（Immanuel Wallerstein）は，アフリカでの実証研究に不満を感じると方向転換をし，植民地状況の一般的特質を見出すために，ヨーロッパを中心とする理論研究すなわち「世界システム論（World-system）」へと大胆に移行した（ウォーラーステイン，1981a : 3-5）。フィールドを見るばかりではなく，今現在の姿は，植民地的な状況とつながっているというポストコロニアルな文脈で理解する必要がある。つまり，彼が個別研究を全体的な歴史とかかわらせる方向へと移行させたように，問題は，研究対象地域の時空間スケールをどう把握するのか，そしてスケール間をどう結び付けるのかに尽きるように思う。

2. 方法と手順

こうした問題意識から本稿では，地理学の概念とは若干異なるものの地理学のスケール理解に貢献すると思われるグローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーという研究分野のスケール概念を整理しておきたい。もちろん，筆者は歴史学を専門とするわけでも，歴史地理学を専門とするわけでもないが，幸い世界システム論にしてもグローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーにしても内外ですでに多くの専門家が基本的な概念の整理をおこなっているので，今回はその成果を利用したい。

ここで検討するスケールは「歴史学」というディシプリンのスケールではあるが，その内容は地理学の分野のそれとも重なる部分が少なくない。あるいは，空間論的転回（spatial turn）ないし空間論的革命（spatial revolution）を経た姿であるだけでなく，今なお空間論的転回を成し遂げつつある（Conrad, 2016 : 66）。当然，こうした空間や地理に関わる用語は，地理学の地域や空間と近い部分もあれば，異なる部分も多い。しかも地理学における空間や場所という概念をめぐる議論には厚い蓄積がある。ただ，ここでは用語の齟齬から来る不毛な議論を避けるために，あえて地理学のそれとの比較は行わない。また，こうした考え方の影響を受けた地理学研究もあるが，それにも極力触れず，ここではあくまでグローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーという研究分野の空間やスケールを検討することに集中する。

順序としてはまず，時空間スケールの理解に関してワールド・ヒストリーに大きな影響を与えたウォーラーステインの「世界システム論」から入ることにしたい。というのも，世界システム論は地理学の分野でも比較的ポピュラーであり，抵抗感がないと考えられるからである。具体的な順序としては，まずは次のⅡにおいて「世界システム論」の時空間スケールの検討をおこなう。地理学への世界システム論の導入についても簡単におさらいしておきたい。その延長として，Ⅲにおいてワールド・ヒストリーやグローバル・ヒストリーと呼ばれる分野での「空間」や「地域」の扱いを検討する。

Ⅱ　世界システム論

1. 世界システム論の時間と空間のスケール

ウォーラーステインの著作については世界システム論関連のみならず（1981 ; 1993 ; 1997a ; 1997b など），数多くの著作がこれまでに邦訳されている。地理学の分野でも，彼の考えは経済地理学の分野を中心に普及した。たとえば，主要な経済地理学者を取り上げた『現代経済地理学』（高木，2000）でも彼が取り上げられている。あるいは『空間の経済地理』（杉浦，2004）においても簡略に彼の考え方が説明されている（杉浦，2004 : 109-110）。経済地理学会編（2018）においてもウォーラーステインの世界システム論は数か所で簡単に触れられている。経済地理学関係での言及を挙げたが，あるいは Knox and Marston（1998）の人文地理学のテキストでも，第 2 章「The Changing Global Context」全体を世界システム論に沿って古代から現代までのグローバル化の地理を説明する章に当てている。de Blij *et al*.（2013）は世界地誌のテキストであるが，この本ではウォーラーステインの名前や世界システムという言葉こそ出していないものの，中核・周辺関係を軸に世界各地の地誌を分析しており，世界システム論の影響は明らかである。

このように内外で普及したウォーラーステインおよび世界システム論自体を改めてここで細かく説明する必要はないだろう。ごく簡単にまとめるなら，ウォーラーステインが提唱した「世界システム」とは，政治的・経済的な競争によって結びつけられた相互依存的なシステムのことであり，彼は 15 世紀に生まれた世界システム（ヨーロッパを中心としたので「ヨーロッパ近代世界システム」とも言う）が，500 年をかけて，地球全体をこのシステムに組み込んだと主張する。したがって，グローバルな地理的な変化を，歴史的に理解する上で有効な理論である。

時空間のスケールの点から見れば，やはりこの理論がここまで人口に膾炙したのはその単純さにあろう。時間のスケールの点では，ウォーラーステインによれば，これまでの人類の歴史には，三つの生産様式しか存在しない。①ミニシステム（mini-systems），②世界帝国（world-empires），③資本主義世界経済（a capitalist world-economy）すなわち「世界システム」であり，④社会主義世界政府（a socialist world-government）は想像されはしたが実現しなかった（Wallerstein, 1978 : 5）。

同様に，空間のスケールの点では，歴史的に前述の①→②→③の順で空間のスケールは拡大した。そして，世界システムの内部には，中核（core），半周辺（semi-periphery），周辺地域（periphery）の 3 地域しか存在しない。かつてはシステムの外部である広大な外部世界（external arena）が存在したが，現在は地球全体が世界システムに組み込まれてひとつのシステムになった。少し前までは中核地域にとって必要な物資がなく，物理的にも経済的にも切り離されていたシベリアの奥地やアフリカ大陸の奥地さえも今では天然資源の宝庫であることがわかり，それゆえ資源をめぐる紛争が絶えない状況を想像すれば，もはや外部世界が存在しないことは容易にわかる。そして，二百近い数の独立国が並立する複雑な現代世界の把握には，3 地域という単純化

は魅力的である。また，それまでの「従属論」では，中心と周辺という 2 つの地域を想定するのみで，歴史的な変化を説明することが難しかった。ところが，「半周辺」というもうひとつの地域（つまり中核には搾取されるが，政治的にうまく立ち回ることができれば周辺からは搾取が可能で，搾取による資本蓄積が可能な地域）を加えるだけで，植民地であった地域が周辺から半周辺，中核に昇格した現実を説明することが可能になった。

このように世界システム論は，長期の歴史的変化と広範囲の地理的変化を同時に把握・説明する上で魅力的である。また，グローバルな商品連鎖（global commodity chains）も世界システムを考える上での重要な概念であり，こちらは世界システムの文脈を離れても頻繁に利用されているように思う。

2. 地理学による世界システム論の受容

1）政治地理学者テイラー（Taylor）

地理学による世界システム論の受容についても簡単に振り返っておきたい。Flint and Shelley（1996）は，世界システム論の地理学への貢献を整理しているが，政治地理学者であるテイラー（Taylor）の一連の研究がその検討の中心を成している。この研究では，地理学と世界システム論の間で問題となる「地域（regions）」「ヘゲモニー」「場所（places）」という概念についても研究を整理し，地域や場所は世界システムの中で捉える必要があるとしている（ただし，ここでの地域や場所という概念は，地理学の一般的なそれであって，特別な概念ではない）。そして，世界システム論ローカルとグローバルの相互作用を理解する点でも便利であり，この考え方を利用すれば国家の役割を過大視することなく，場所とグローバル経済の関係を理解できるようになる（Flint and Shelley，1996 : 504-505）。なお，フリント（2014）の政治地理学のテキストでは，「ウォーラーステインの世界システム論」というコラムが設けられている（フリント，2014 : 253）[1)]。

後に Flint（2010）は，再度世界システム論の政治地理学への影響を整理している。ここでは彼は，「世界システム論は，1970 年代と 1980 年代の政治地理学のリバイバルに必須であった」（Flint，2010 : 2828）と述べつつも，現在の政治地理学では日常のスケールが主流になり，世界システム論のような大きなスケールは用いられなくなったとしている。

同様に，ウォーラーステインの提唱する「商品連鎖」は，世界都市の分析で利用されることも多いが，これは世界都市がグローバルな商品連鎖のノードとなっているからである。これも先の Taylor（2004）のそれを参照しておけば，彼は，現代の世界都市のネットワークを扱う前に，歴史的な位置づけをおこなっている。つまり，アブー＝ルゴドの主張するウォーラーステインの世界システムに先行する「世界システム」を要約し，1300 年頃のヨーロッパからコンスタンティノープルやタブリーズ，サマルカンドを経由して陸路で中国に至るルートや，カイロやダマスカス，バグダードやホルムズを経由して海路で中国に向かうルートを検討し，直接ヨーロッパから中国に商品が輸送されるのではなく，都市が交易センターとなり，都市間の交易によって結果的に長大なネットークが形成されている点を重視している。ところが，大航海時代に世界中に支店

を配置する商社のネットワークが生み出され，やがてシステムの中で特別な場所である「世界都市」を有する近代世界システムが誕生したとしている（Taylor, 2004 : 8-14）。

このように，欧米の地理学の分野でウォーラーステインの考え方を積極的に取り入れたのは，最初は政治地理学の分野であった。とくに，先の Taylor がその先導役をつとめた。

2）日本の場合

日本の地理学の分野で世界システム論を積極的に導入・紹介したのは，上野登（1996）や高木彰彦（1991）である。ただし，前者はマルクス主義地理学の派生としての導入である[2)]。後者の高木は，政治地理学者 Taylor の一連の研究から世界システム論を検討（1991）し，さらにテイラー（1991）を翻訳したことを考えれば，直接にではなくテイラーの研究を経由しての導入であることは明らかである。そして，政治地理学の分野では一定の導入があったとしても，社会地理学や文化地理学，あるいは歴史地理学などの分野で世界システム論が普及したかというと疑わしいように思う[3)]。

3. 世界システム論の拡張と批判

1）世界システム論の拡張

欧米の社会学や歴史学，政治学の分野では，世界システム論を使った分析が花開いた。そのすべてにあたることは不可能なので，ここでは，ウォーラーステインの本来のスケールを拡張する主要な研究に限定してみておくことにする。

たとえば，ワールド・ヒストリーの概説書でも参照されることの多いアブー＝ルゴド（2001）は，ウォーラーステイン以前に世界システムがあったとして，いわゆる「13 世紀世界システム論」を唱えている。このアブー＝ルゴドの場合は近代の直前への当てはめであるが，先にも述べたように，ウォーラーステインの単純化は簡便であるため，「世界システム論」の空間認識を拡張し，遠く古代世界にまで当てはめようと試みる研究者が増えてきた。ただし，当てはめることが適切かどうかについては議論が分かれており，この点については，Schneider（1991），Algaze（1993），Bosworth（2000），Steremlin（2008），Hall *et al*.（2011）などを参照されたい。

古代への当てはめとして *Journal of World History* 誌に掲載された Beaujard（2010）の研究を参照すると，彼は，アケメネス朝を含む「西の世界システム（Western world-system）」，中国を中心とする「東の世界システム（Eastern world-system）」，「インド世界システム（Indian world-system）」という古代の 3 つの並立する世界システムを想定している。そして，この古代の世界システムと近代の世界システムの相似性を強調し，鉄器時代の世界システムでは「中核」地域が，それ以前のメソポタミアとエジプトからイラン高原および地中海沿岸地域へと移動したと分析している。また，鉄器時代のアケメネス朝ペルシアは，西アジア世界での商・工・金融・海運面のその支配力に関して 19 世紀の大英帝国と相似すると強調している。

この近代以前への拡張に関連したもう一つの発展の方向としては，覇権国のヘゲモニーの盛衰や長期サイクルとしての政治権力の移行を分析する方向に世界システム論を展開させた一連の研

究を挙げておくべきだろう。それは社会学や政治学的な領域での発展であり，フランクやアミン，モデルスキー（1991），Chase-Dunn and Hall（1991 ; 1997）をその代表として挙げることができる。または Chase-Dunn and Anderson（2005）や Gills and Thompson（2006），Manning and Gills（2011）などの編著作に寄稿している一連の論者を代表者として挙げることができる（これらの著作では寄稿者の多くは重複しており，この分野のリーダーが誰であるのかが良くわかる）。

実際，従属論で有名なフランク（1980）やアミンも世界システム論の影響を受けたことで，世界システム論を批判しつつその過程で世界システムの時間のスケールを拡張し，また空間のスケールをヨーロッパ以外に展開させている。フランクは邦訳された大部の『リオリエント』（2000）が有名であるが，Frank and Gills（1993）では，世界システムを過去 5000 年にわたる長期の現象と把握している。すなわち，紀元前 3000 年から紀元 1600 年までを 11 期に時期区分した上で，さらに各期を「拡大局面（A phases）」と「衰退局面（B phases）」の 2 つに細分して，過去 5000 年間のシステムのサイクルを明らかにしている。そして Frank らのこのサイクルの妥当性は，Wilkinson（2000）や Bosworth（1995）によって Chandler のデータを使用して検証がおこなわれている（Frank and Gills, 2000 : 11-12）[4)]。

一方，従属論で有名な Amin も，ウォーラーステインおよびフランクの考え方を細い点では批判しつつも，世界システム論を古代にまで拡張している[5)]。つまり，Amin（2011）は，近代になって資本主義が世界を統合したというイメージはヨーロッパ中心主義的な見方であり，確かに資本主義は近代になり質的に新しい時代を迎えはしたが，それ以前にも世界はバラバラだったわけでも，中心／周辺という構造がなかったわけでもないと主張する。もちろん，それは資本主義的な中心／周辺ではないが，質的には貢納制であっても中心／周辺という構造は存在したとして，ヘレニズムに遡る紀元前 300 年から紀元 1500 年までのユーラシアからアフリカにまたがる「貢納制世界システム（tributary world system）」について分析している[6)]。ちなみに，Amin（2011）に掲載されている模式図（Amin, 2011 : 33）では，ヘレニズム地域（ビサンツ，サーサーン，アラブ・カリフ朝），中国，インド，中央アジア，東南アジアが中核に位置づけられて，ヨーロッパ，アフリカ，日本，東南アジア（東南アジアは重複している）は周辺に位置づけられている。

いずれにせよ本来の世界システム論の時間と空間のスケールは大幅に拡張されつつある。そして，こうした拡張は，ウォーラーステインの提唱した「世界システム」を，ヨーロッパを中心とする特殊かつ普遍的なシステム（地理的にはヨーロッパを中心とし，歴史的には近代に限られる世界経済）とみなさなくなったことを示している。

2）世界システム論からグローバル・ヒストリー，ワールド・ヒストリーへ

ウォーラーステインは社会学者に分類されることが多いが，社会学の枠にとどまらず，彼の世界システム論は，歴史学の分野にも多大な影響を及ぼした。そこでワールド・ヒストリーへの貢献をまず確認しておこう。

ワールド・ヒストリー研究の主要な先導者でありアメリカ歴史学会会長を務めたマニングは，ワールド・ヒストリーおよびその隣接分野における研究動向を整理しているが，1965～1990 年

の時期における世界史研究への最大の貢献者として以下の 3 人を挙げている（マニング，2016 : 88-100）。それは，フィリプ・D・カーティン，ウォーラーステイン，クロスビーである。カーティンはアフリカ史研究で有名な学者であるが，イランのアルメニア人商人の長距離交易を含む世界中の交易ディアスポラ史に関する著作も有名である（カーティン，2002）。もうひとりのクロスビーはグローバルな生態系史研究が有名である（クロスビー，1998 ; 2004）。そして，ウォーラーステインについては「近代世界システム論は，歴史解釈の国民的枠組みを乗り越える闘いの主要な戦線を切り開いた」（マニング，2016 : 96）と評価している。

日本のグローバル・ヒストリーの主導者の一人である水島は，「ウォーラーステインの議論は，そのスケールの大きさ，あつかう地域や事象の広がり，明確な論理設定のゆえに，その後の域圏，地域連関，世界の構造化，ヨーロッパを中心とするグローバリゼーションなどの諸研究を大きく進展させる結果を生んだ。その意味で，ウォーラーステインは，グローバル・ヒストリー研究の生みの親の一人である」（水島，2010 : 13）と評価している。

ウォーラーステインの著作を数多く翻訳している山下の整理では，世界システム論は，一国史観批判に根拠を与えるパースペクティブとして広範に受容される一方，近代世界システムの連続性をめぐって，フランクの『リオリエント』に代表される反ヨーロッパ中心主義批判を招き，中国とヨーロッパの近代以降の差を説明する大分岐論争へとひらかれていったとしている（山下，2016 : 363）。また，山下は，世界システムとグローバル・ヒストリーの関係について，「グローバル・ヒストリーの試みは，史的システムという単位を，より大きな空間的文脈に再度ひらくことで，この運動としての世界システム論の役割を更新しつつ引き継ぐものである」（山下，2016 : 89）とする。

ここまでの議論から世界システム論がワールド・ヒストリーに大きな影響を与え，その重要なルーツのひとつであることは明らかだろう。それではワールド・ヒストリーからの批判はどこにあるのだろうか。まず Conrad（2016）によれば，グローバル・ヒストリーというアプローチから世界システム論に対する批判は，

①経済還元主義という点

②システム重視のあまり，ローカルが軽視される点

③ヨーロッパ中心主義を招きかねないという点

にあるとしている（Conrad, 2016 : 49-50）。

また『大分岐』（ポメランツ，2015）でワールド・ヒストリー研究に大きな議論を生んだ Pomeranz は，近年の世界システム論の批判として，

①本来の世界システム論が考えるほど，「周辺」は「中核」に完全に支配されていたわけではない

②量的な研究では，ヨーロッパの資本蓄積にとって「周辺」からの搾取が決定的に重要であったことを示さない

③重要な用語の定義（たとえば，「半周辺」）が漠然としている

という 3 点を挙げている（Pomeranz, 2018 : 173-174）。

歴史地理学者からの批判点も見ておこう。グローバリゼーションの歴史地理を検討した歴史地理学者オグボーンは次のように述べる。

> ウォーラーステインの理論を批判することは，17・18 世紀の資本主義的な商人や国家によってもたらされたグローバリゼーションの形態を，単一のシステムとして理解するのではなく，構築され，拡大され，維持されねばならなかったネットワークの連なりとして，また人々や船舶，資本，情報が移動していったネットワークの連なりとして概念化しうる可能性を考える扉を開くことになる。（オグボーン，2005 : 52）

まとめるなら，世界システム論のスケールは国民国家，国民経済の枠組みを乗り越える道を切り開いたが，なおも問題があり，さらに重層的，重複的な空間が求められているといえる。

Ⅲ　ワールド・ヒストリー，グローバル・ヒストリー研究の空間把握

1. ワールド・ヒストリー，グローバル・ヒストリーの誕生

1）用語の整理

遅くなったが，ここでワールド・ヒストリーやグローバル・ヒストリーおよびそれと類似した用語を確認しておきたい。

Sachsenmaier（2015）は，世界史（world history）はヨーロッパ中心主義的な大きな物語を意味した歴史を持つがゆえに，1980 年代末から増加した地域横断的な（cross-regional）結びつきを考究する学問は，世界史ではなく「グローバル・ヒストリー」や「トランスナショナル・ヒストリー」という用語を使うのを好んだとし，今では「ワールド・ヒストリー」という用語が「グローバル・ヒストリー」という用語と置き換え可能になったことを驚きであると述べている（Sachsenmaier，2015 : 74-75）。つまり，今ではワールド・ヒストリーとグローバル・ヒストリーは，類似した内容を持つ置き換え可能な用語となったのである。

また，「ビッグ・ヒストリー」「ディープ・ヒストリー」なども似た言葉としてあるが，ビッグ・ヒストリーは人類の誕生にとどまらず，宇宙の誕生から現在までの歴史をトータルに扱う。この点で，人類さえも歴史の特権的な主体ではなく，相対化されている（クリスチャン，2016）。一方，ディープ・ヒストリーは人類の歴史全体を分析対象とする。

次に，グローバル・ヒストリーの制度的な確立について確認しておけば，先のマニングらの尽力のより Northeastern University の歴史学の博士課程プログラムに 1994 年秋に「ワールド・ヒストリー」のコースが設置され，博士号を授与するようになった（Manning, 2005 : 230）。この分野の制度的な確立はすでに二十年以上になる。また，綿花を主題にグローバル・ヒストリーを分析したことで高い評価を得ている Beckert は，彼が編著書の一人となった著作の中でハーバード大

学図書館にはタイトルに「グローバル・ヒストリー」と入った 437 冊の書籍が蔵されているが，このうち 1962～1990 年の間に出版されたものは 30 冊，1990 年代の出版は 26 冊に過ぎず，半数以上が 2010 年代に入って出版されたものであると述べている（Beckert and Sachsenmaier, 2014 : 1）。その一方で，グローバル・ヒストリーは，歴史学の分野で近年になって生まれた革命的な考え方ではなく，古くから考えられてきたことの延長で理解されなければならないと指摘する研究者も少なくない（Hughes-Warrigton, 2015）。そうした指摘に従い「グローバル・ヒストリー」研究の伝統は古いとみなすにしても，やはりその勃興はきわめて新しい現象であるとみなすべきである。

2）従来の世界史との関係

続けてこうしたヒストリーの具体的な内容についても確認しておこう。クロスリー（2012）は，SF 作家として有名な H・G・ウェルズを引用しつつ次のように述べる。

> 彼の基本的理解は，今なお，われわれが今日「ユニヴァーサル・ヒストリー」，「グローバル・ヒストリー」，あるいは「ワールド・ヒストリー」として理解しているものによく当てあてはまる…事実を発見し，そこから第一次的な歴史を組み立てるという不可欠な作業は，グローバル・ヒストリーに取り組む歴史家の仕事ではない。彼らはむしろ他の歴史家たちが行った研究を使って，比較を行い，大きなパターンをつかみだし，人類史の本質と意味を解き明かすような変化について，その理解のしかたを提起するのである。（クロスリー，2012 : 5）

> 歴史家は最初の訓練レベルとして，第一次史料の入手と利用を学ぶ…このような訓練の基本と，オリジナルな知識を生み出すことに専念する点で，歴史家とグローバル・ヒストリーの書き手とは共通するところがほとんどない…（クロスリー，2012 : 153）

さらに，水島の主張も少し長くなるが引用しておきたい。彼は，歴史学における環境史研究の遅れについて，次のように言う。

> 史料批判と呼ばれる厳密な史料の解釈－これを史料批判と呼ぶ－を歴史学固有の方法とし，そのために…歴史学固有の方法的禁欲さのために，環境を正面から扱おうとする取り組みは遅れた。そして，医学をはじめとする他の自然科学を専攻する研究者が，グローバル・ヒストリーという文脈の中で，GIS（地理情報システム）をはじめとする斬新な手法と多様なデータを駆使して見事な成果を次々に発表し，この領域に切りこんできていることを傍観することになった。彼らは，人類と環境とを並行して扱うのではなく，環境の中に人類を位置づけた。そして，歴史学が正面から取り扱うことのなかった気候変動，地表変化，エネルギー，生活水準，人体，寿命，人口，移動，疫病などのテーマをとりあげ，それらに関する

非文字データを集め，蓄積し，分析することで大きなインパクトを与えることに成功した。それに対し，歴史学に携わる者は，人類史，地球史を再構築するという課題への取り組みに大きく遅れをとってしまった。（水島，2016 : ii-iii）

このようにグローバル・ヒストリーは一次史料に依拠し，細分化した従来の歴史学とは全く異なるアプローチを採る。個性記述的，法則定立的という 2 区分にしたがうなら，個性記述的な学問というよりは，法則定立的な学問といえる。地理学の場合も，個性記述的な地誌学と法則定立的な系統地理学の 2 つに便宜的に分けられることが多いが，この 2 区分に当てはめるなら伝統的な歴史学の場合は，一回きりの個性記述的な学問であると一般的にはみなされてきた。そうした個性記述的な個別の研究の蓄積の上に，パターンを把握するというのがグローバル・ヒストリーであり，ワールド・ヒストリー研究ということになる。

そして，Conrad が，「グローバル・ヒストリーは，表面的には時間の用語（the language of time）を語らない」（Conrad，2016 : 141）と述べているように，グローバル・ヒストリーの分野で多用されるのは，空間（space）や空間性（spatiality），地図化（mapping），流通（circulation），モビリティ，フロー，ネットワーク，ノード，領土化（territorialization），脱領土化（deterritorialization），ランドスケープといった空間や地理に関わる用語である。もちろん，これらは地理学で実際に用いられる用語とは意味合いや用法が若干異なる。そして，歴史学の分野での空間的用語の多用は，いわゆる空間論的転回や空間論的革命の結果である。

こうした転回を経た歴史学が，グローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーということになる[7)]。そこで次節以降で，グローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーの想定する空間についてその概略を把握しておきたい。

2. グローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリー研究の想定する空間とスケール

1）グローバル・ヒストリー研究の空間とスケール

2004 年 3 月にボストンで開催された「（World History : The Next Ten Year）」というカンファレンスが基になったのが『ワールド・ヒストリー：グローバルとローカルの相互作用（*World History : Global and Local Interactions*）』（2005）である。本書の中で編者の Manning は，ワールド・ヒストリーというアプローチを簡単な概念図（Manning，2005 : 237）で説明している。すなわち，ひとつの点からそれぞれ別の方向に延びる

①空間（space）

②時間（time）

③トピックス（topics）

という 3 本のベクトルである。①空間の軸は，大地域（large regions）や小地域（small regions）あるいは地域の比較や地域の相互作用，グローバル空間のパターンなどのスケールを示している。そして，空間という次元は重要であるが，空間のみが，ワールド・ヒストリー研究者の考察

すべきイシューではなく，時間とトピックスという次元も考慮しなければならないと述べる。その②時間の軸では，長短の時間のスケールが扱われるにとどまらず，ワールド・ヒストリーの研究者は時間軸を延長した先にある未来にも取り組む。そして，③トピックスの軸に沿って，どのトピックス（たとえば，経済やジェンダー，アイデンティティなどトピックスはさまざま）が強調されるのかが決められる（Manning, 2005 : 237-238）。抽象度の高い概念図ではあるが，要するに，「グローバル・ヒストリーにおける「グローバル」とは，地域（regions）の幅だけではなく，時間の枠，および対象の強調と相互作用の範囲を意味する，という理解が強まりつつある（Manning, 2005 : 238）」という[8)]。

ポストモダンの空間に関連する人文地理学の分野の 39 本にもおよぶ重要な研究をリーディングスに編んだ Dear and Flusty（2002）は，イントロダクションにおいてローカルがどのように形づくられるのかを説明するために「地理学的パズル（the geographical puzzle）」という模式図を使って説明している（Dear and Flusty, 2002 : 4）。これによれば，マクロ・メソ・ミクロという「スケール」と構造・制度・行為主体（agency）という「プロセス」を貫く一本の矢印が，複数の「時間」のレイヤーの上に集中するところがローカルであると明示されている。

先の Manning の場合であれば，空間・時間・トピックスの 3 つのスケールを同時に考慮しているが，Dear and Flusty の場合には，時間はスケールというよりも，レイヤーとして想定されている。このようにポストモダンを経たという点では同じ経験をした両者のスケール把握は大きく異なることがわかる。そこで，もう一人，Conrad（2016）の説明も確認しておこう。彼によれば，グローバル・ヒストリーにおいて空間的比喩が多用されるのは，発展や後進性という旧来の用語を置き換えるため，つまり，近代化論批判のためである。また，国民国家や帝国，文明を批判するためでもある（Conrad, 2016 : 66）。いずれにせよ，ワールド・ヒストリー研究では地理学ほどに精緻なスケールやスケール間の関係，あるいは時空間のレイヤーに関する議論は詰められていない。それは，地域を研究対象とする地理学というディシプリンとは異なり，歴史を研究対象とする歴史学にとってスケールとは強固な国民国家史観を脱構築，相対化するための道具にすぎないからであろう。

2）グローバル・ヒストリー研究の「地域」

なお，スケールに関する議論の際に，注意しておかなければならないのが「地域（region）」である。そして，本稿では，地理学の概念にはあえて触れないとあらかじめ断ったが，「地域」については触れておく必要がある。つまり，地理学の分野からみて，グローバル・ヒストリーやワールド・ヒストリーの用語において，スケールとのかかわりで違和感があるのは，「地域」という単位の扱いにあるのではないだろうか。元々，歴史学の分野での「地域」は，比較的広域な範囲を包括する概念である。それは，ワールド・ヒストリーの起源のひとりであるブローデルの「地中海」という「地域」を考えてみれば良くわかる。ブローデルは地中海という地域を次のような非常に広い範囲とみなしている。

このような気候の極限は，地中海沿岸から遠くに置くべきである。一方は，ヨーロッパを縦断して，夏にサハラ砂漠の乾燥が達する国々にまで，もう一方は，アジアとアフリカを通して，冬に，広大なステップ地帯の真ん中でさえ，大西洋の低気圧がもたらす雨が達する地域にまで置くべきである。（ブローデル，1997 : 389）

同様に，ワールド・ヒストリーの想定する空間のスケールの順序は，ローカル－ナショナル－リージョナル－グローバル（あるいは，ローカル－ナショナル－リージョナル－トランス・パシフィック－グローバル）となる。地理学の場合のスケールでは，通常ローカル－リージョナル－ナショナル－グローバルの順序を利用することが一般的であろう（Murray，2006 : 46-48）。また，本稿において何度も名前を挙げた政治地理学者 Taylor（2003）は，20 世紀のイギリス地理学における地理的スケールについて論じており，その中でナショナルなスケールへの対抗の流れについても説明しているが，やはり基本的にローカル－ナショナル－グローバルの図式（あるいは計量地理学に関してはインターナショナル－ナショナル－サブ・ナショナル－ローカルの図式）を使っている。したがって，リージョナルを「地域的」「地方的」とみなすとしても，ワールド・ヒストリーのそれは相当に範囲が広い。地理学の場合には「地域」はマルティ・スケール（浮田，1995）とみなされるとはいえ，地理学のいう「地域」はむしろこの順序では「ローカル」に相当する範囲と考えるのがしっくりするのではないだろうか[9)]。

Conrad（2016）はグローバル・ヒストリーと競合するアプローチとして，世界システム論を含む 5 つのアプローチを挙げている。そこで，スケールを考えるために，ここでそれぞれの特徴をスケールの観点から簡単に確認しておこう。この 5 つとは，

①比較研究（Comparative studies）
②トランスナショナル・ヒストリー（Transnational history）
③世界システム論（World-systems theory）
④ポストコロニアル・スタディーズ（Postcolonial studies）
⑤マルティプル・モダニティーズ（Multiple modernities）

である。いずれも類似する学問領域であるが，スケールの点では，①が帝国全体や文明全体などきわめて広大なスケールを扱うのに対し，②のスケールも広大ではあるが，①よりは限定的なスケールであり，モビリティや循環（circulation）という概念を重視する。したがって，そのスケールは，インド洋や大西洋にまたがるような研究を想定すればわかりやすい。③は，個別の事例や国家を出発点とする①と②とは異なり，システムを対象とする（Conrad, 2016 : 37-61）。

3. 羽田正の新しい世界史の空間

最後に，日本人研究者によるワールド・ヒストリーの展開を整理することにすることで，ワールド・ヒストリー研究が考える地域や空間を改めて確認しておきたい。

羽田正（2008 ; 2016 ; 2017 ; 2018 など）は，水島（2008 ; 2010 ; 2016 など）や秋田（2008 ;

2013 ; 2018 など）と並ぶ，日本におけるグローバル・ヒストリー研究の第一人者であり，多数の著作の編著者をつとめこの分野をリードしてきた。羽田は「ワールド・ヒストリー」というカタカナ表記は使用せず，「新しい世界史」という表現にこだわる。もっとも，2011 年の著書『新しい世界史へ』では，羽田自身は「グローバル・ヒストリーという研究の手法と私の考える新しい世界史の関係」（羽田，2011 : 100）について，「私が提唱する地球社会の世界史という考え方と多くの点で共通しており，地球規模で人類の歴史を捉えようとする点で，両者は基本的に同じ研究ジャンルに属すると言ってよい」（羽田，2011 : 101）と述べているように大きな違いはないと思われる（英訳されたタイトルは *New World History*（Haneda, 2018）と区別がつかなくなってしまう）。

彼によれば，現行の世界史の弱点を克服するには，「中心性の排除と関係性の発見（102 頁）」が必要であり，これまでのヨーロッパ中心史観やイスラーム中心史観，中国中心史観，日本中心史観などを批判すると同時に，中心・周辺という考え方が中心史観に近い点において世界システム論も批判している（羽田，2011 : 120-123）。

そして，羽田は中心史観ではない歴史の見方として，

①世界の見取り図を描く

②時系列史にこだわらない

③横につなぐ歴史を意識する

という 3 つの方法を提案している（羽田，2011 : 166-167）。

その簡単な例として，海域世界史の可能性と限界を論じ，「東シナ海という海を中心に置いた空間を想定し」（羽田，2011 : 144），ジャンク船が交易する範囲や海を越えて禅宗が流布した範囲，醤油が使われる空間，キリスト教が禁止された空間，漢字で意思疎通が図れる空間など，ひとまとまりの空間を想定するための要素を多数挙げ，「地理的な海の上にこのような多様な仮想空間（レイヤー）が層をなして複数重なった総体を，「海域世界」と呼べばどうだろう。レイヤーの大きさと広がりは均一ではない」（羽田，2011 : 145）と提案している。つまり，ネットワークでつながった範囲・領域がさらに複数重なったものが「地域」ということになる。そして，「海域世界史の可能性は，それぞれの海域世界史を研究し，描こうとする人たちが，それ自身で完結した閉鎖的な空間ではなく，常に外に開かれている空間を思い描けるかどうかにかかっている」（羽田，2011 : 146）と国民国家のような閉じた空間ではなく，開放的な空間の重要性を強調している。ただ，羽田はこうした複数のレイヤーをどのように重ねるべきかについては具体的な説明をしていない。こうした複数のレイヤーを階層化することは，ともすれば全体を俯瞰するような時間と空間の実体化を生みがちであり，この点からレイヤー間の安易なつながりを想定することは避けたと解釈できよう。

なお，こうした主張は，羽田（2018）の最新の著作でも変わらず，1700, 1800, 1900, 1960 年の 4 枚の世界の見取り図（実際に図を描いているわけではない）を示し，その上で現在（2018 年）の世界の特徴を説明している。近代の国家は，空間的な囲い込みを行うことで，境界線の内部に

排他的に権力を行使することが可能となった。しかし，国民国家が主流となる以前の帝国では，国民国家のようにしっかりと領域が定まっていたわけではなく，曖昧なものであった。したがって，特定の国民（ネーション）として囲い込むこともなかったのである[10)]。

Ⅳ　むすびに代えて

ここまでの検討で明らかになったように，グローバル・ヒストリー研究においては，ネットワークでつながった範囲・領域を指し示すのが「region」「regional」，つまり「地域」ということになる。またそれは，「地域」の物的な広さ，狭さというだけでなく，オルタナティブな「地域」を意味していることにも注意が必要である。したがって，地理学の概念とは少なからず違いが生じることになる。ただ，学問が時代状況に制約される以上，同じ時代の人文・社会科学として方向性は同じと考えてしかるべきである。その点で，ここではできなかった地理学における空間など諸概念の再整理と比較が必要と考えられる。

さりとて，グローバル・ヒストリー研究での「地域」という用語は相当に曖昧な概念であり，曖昧な広がりであることには十分な注意を払わなければならない。そして，その曖昧さと多義性こそが強固な国民国家や国民経済あるいは近代化論を相対化する方法として，あるいはその後の捉えどころのないグローバル化を理解する方法として望まれていたとみるべきであろう。それならば，地理学の分野で長年積み重ねられてきた精緻な議論は逆に不自由さを生むだけかもしれない。繰り返しになるがスケールや地域は，ここでは目的を達成するための便利な道具にすぎない。

思えば重層的かつそのつど改めて境界の引き直される曖昧な空間や場所という発想は，地理学の分野でもフェミニズム地理学を中心に以前から盛んに言われてきたことではないのか。たとえば，かつて筆者が訳したナッシュ（2000）は，風景や地図をモティーフとするキャシー・プレンデルカスト（Kathy Prendergast）というアイルランドの現代芸術家の作品を分析しつつ，そこに重層的な場所認識の可能性を見出そうとした。つまり，アイルランドの風景を歴史的・文化的な重荷を背負わされたものとしてではなく，抑圧的なアイデンティティのくびきから解放されたものとして読み替えようとしたわけである。ナッシュは，この論文の末尾を「ポストコロニアルかつフェミニスト的な再地図化（remapping）と新たな名付け（renaming）は，ある権威的な表象を別なそれに置き換えるのではなく，複数の名前や複数の地図に置き換えることなのだ」（ナッシュ，2000 : 102）と締めくくっている。

あるいは Gibson-Graham（2006a ; 2006b）も大文字の「資本主義」を脱構築し，ラクラウの転移やアルチュセールの重層的決定といった概念に依拠しつつヘゲモニックで一枚岩な，それ以外の存在を許さない大文字の資本主義の空間から多元的な空間を想起するためにダイヴァース・エコノミー（diverse economies）という考え方を提唱している。ただし，これらに関しては，ワールド・ヒストリーの空間や地域について検討した本稿の範囲を超えるので，別に論じたいと思う。

注

1）最新の 3rd edition である Flint（2017）においても同じコラムがある（Flint, 2017 : 220）。

2）後に上野（2012）は，世界システム論とは関係なく，古代からデジタル革命後の今日まで長大な期間を分析している。

3）もちろん，ベイカー（2009）『地理学と歴史学』においても，空間論の研究史の整理の中で，ウォーラーステインの世界システムにも簡単に触れている（ベイカー，2009 : 105-106）。Morrissey *et al*.（2014）の *Key Concepts in Historical Geography* を翻訳したモリッシーほか（2017）の『近現代の空間を読み解く』でも，簡単に触れられている（モリッシーほか，2017, 146 and 167）。

4）Chandler のデータについては，吉田（2017）を参照されたい。

5）Manning & Gills（2011）編のフランクを記念する論文集に，ウォーラーステインは前文を寄せている。その中で，彼は 1970 年代にフランクに出会って，お互いの見方がどれほど重なるかを知り，さらに，ウォーラーステイン，フランク，アミン，アリギ（Arrighi）の 4 人は文化大革命と同じ「四人組（Gang of Four）」と呼ばれるようになったと回顧している。そして，「我々は，近代世界の分析の少なくとも 80 %には合意した（Wallerstein, 2011 : xx）」と述べているが，彼はフランクの提唱する 5000 年以上にわたる世界システムという考え方には賛成できなかったとも断っている。

6）アミンは，マルクスの段階論は否定し，単一の生産様式を意味する「貢納制的生産様式（tributary mode of production）」という用語を避けて，あえて「貢納制社会（tributary society）」という表現を使用している（Amin, 2011 : 13-14）。

7）グルディ＆アーミテイジ（2017）は，空間論的転回と並んで，言語論的転回，社会論的転回，文化論的展開，国家横断論的転回，帝国論的転回，グローバル論的転回，国際論的転回，批判論的転回などさまざまな学問的な「転回」を挙げているように，実際には空間論的転回にとどまらず，こうした転回の総合的な影響の結果であろう（グルディ＆アーミテイジ，2017 : 68-70）。また，現代歴史学における文化論的転回や空間論的転回，時間論的転回，言語論的転回などを検討した長谷川（2018）も参照されたい。

8）Manning はワールド・ヒストリー研究には，この 3 つの次元に加えて，スケールと哲学（philosophy），検証（verification）という 3 つの次元を加えるべきとしている（Manning，2005 : 238-239）。また，空間，時間，トピックスの関係が図示はされていないが，マニング（2016）の第 15 章「歴史におけるスケール－時間と空間」も参照されたい。

9）浮田（1995）はマルティ・スケール・ジオグラフィを主張する。ただ，時代的な限界もあろうが，その内容はナショナルなスケールに強く制約されている。

10）蛇足にはなるが一見すると逆にみえる日本の潮流にも触れておきたい。直接的には，日本の民俗学や考古学の分野から出てきた比較的新しい言葉ないし学問領域に「地域学」がある。たとえば，中路は，「「地域学」とは何かということすらまだ明確な規定がなされているとは言えません。しかしそれに携わる多くの人々の共通して理解していることは，地域を，中央との関わりにおいてではなく，むしろその地域に根をおいた仕方で明らかにしてゆこうということです」（中路，2005 : 4）と主張している。この点，構造や中央に捉われないでその地域自体をみる地域史や地方史と，先のワールド・ヒストリーやグローバル・ヒストリーは，逆方向ということになる。悪くいえば，スケールの点でうちに閉じこもる方向ともいえる。ただ見方を変えれば，グローバル・ヒストリーも地域史も同じことを別な方向から追及しているだけなのかもしれない。中央や中央集権的な国民国家を相対化しようとする点では，方向性は同じだからである。

文献

秋田　茂編著(2013).『アジアからみたグローバルヒストリー「長期の 18 世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』ミネルヴァ書房.

秋田　茂編著(2018).『「大分岐」を超えて　アジアからみた 19 世紀論再考』ミネルヴァ書房.

秋田　茂・桃木至朗(2008). 歴史学のフロンティア－地域から問い直す国民国家史観－. 秋田　茂・桃木至朗編『歴史学のフロンティア　地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会, 9-32.

アブー＝ルゴド, J. L.（佐藤次高他訳）(2001).『ヨーロッパ覇権以前：もうひとつの世界システム　上・下』岩波書店.

上野　登(1996).『世界システムの経済地理』大明堂.

上野　登(2012).『世界史の地理的構造』八朔社.

ウォーラーステイン, I.（川北稔訳）(1981a).『近代世界システムⅠ』岩波書店.

ウォーラーステイン, I.（川北稔訳）(1981b).『近代世界システムⅡ』岩波書店.

ウォーラーステイン, I.（川北稔訳）(1993).『近代世界システム 1600～1750』名古屋大学出版会.

ウォーラーステイン, I.（川北稔訳）(1997a).『近代世界システム 1730～1840s』名古屋大学出版会.

ウォーラーステイン, I.（川北稔訳）(1997b).『新版史的システムとしての資本主義』岩波書店.

浮田典良(1995).『地理学入門：マルティ・スケール・ジオグラフィ』大明堂.

オグボーン, M.（上杉和央訳）(2005). グローバリゼーションの歴史地理－1500 年頃から 1800 年頃まで－. グレアム, B. ナッシュ, K. 編（米家泰作・山村亜希・上杉和央訳）『モダニティの歴史地理　上巻』古今書院, 51-83.

カーティン, F.（田村愛理・中堂幸政・山影進訳）(2002).『異文化間交易の世界史』NTT 出版.

クロスビー, A. W.（佐々木昭夫訳）(1998).『ヨーロッパ帝国主義の謎：エコロジーから見た 10～20 世紀』岩波書店.

クロスビー, A. W.（西村秀一訳）(2004).『史上最悪のインフルエンザ：忘れられたパンデミック』みすず書房.

クロスリー, P. K.（佐藤彰一訳）(2012).『グローバル・ヒストリーとは何か』岩波書店.

クリスチャン, D. and ブラウン, C. S. and ベンジャミン, C.（石井克弥・竹田純子・中川　泉訳）(2016).『ビッグヒストリー：われわれはどこから来て, どこへ行くのか：宇宙開闢から 138 億年の「人間」史』明石書店.

グルディ, J. and アーミナイン, D.（平田雅博・細川道久訳）(2017).『これが歴史だ！：21 世紀の歴史学宣言』刀水書房.

経済地理学会編(2018).『キーワードで読む経済地理学』原書房.

杉浦芳夫編(2004).『空間の経済地理』朝倉書店.

高木彰彦(1991). 世界システム論と政治地理学の新たな展開. 地理学評論, **59**(1), 26-46.

高木彰彦(2000). I. ウォーラーステイン－世界システム論. 矢田俊文・松原　宏編『現代経済地理学－その潮流と地域構造論－』ミネルヴァ書房, 196-216.

テイラー P. J.（高木彰彦訳）(1991).『世界システムの政治地理：世界経済, 国民国家, 地方　上・下』大明堂.

中路正恒編(2005).『地域学への招待』角川書店.

ナッシュ C.（吉田雄介訳）(2000). 再地図化および再命名－アイルランドにおけるアイデンティティとジェンダー, 景観の新しい地理学－. 空間・社会・地理思想, **5**, 90-104.

長谷川貴彦(2018). 物語論的転回 2.0－歴史学におけるスケールの問題－. 思想, **1127**, 52-66.

羽田　正(2008).「イスラム世界」と新しい世界史. 水島　司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社, 66-76.

羽田　正(2011).『新しい世界史へ：地球市民のための構想』岩波書店.

羽田　正編(2016).『地域史と世界史』ミネルヴァ書房.

羽田　正編(2017).『グローバル・ヒストリーの可能性』山川出版社.

羽田　正(2018).『グローバル化と世界史』東京大学出版会.

フランク, A. G.（吾郷健二訳）(1980).『従属的蓄積と低開発』岩波書店.

フランク, A. G.（山下範久訳）(2000).『リオリエント：アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店.

フリント，C.（高木彰彦編訳）(2014).『現代地政学：グローバル時代の新しいアプローチ』原書房.

ブローデル，F.（浜名優美訳）(1993).『地中海 3』藤原書店.

ベイカー，A.（金田章裕監訳）(2009).『地理学と歴史学：分断への架け橋』原書房.

ポメランツ，K.（川北稔監訳訳）(2015).『大分岐：中国，ヨーロッパ，そして近代世界経済の形成』名古屋大学出版会.

マニング，P.（南塚信吾・渡邊昭子監訳）(2016).『世界史をナビゲートする－地球大の歴史を求めて－』彩流社.

水島　司(2008). グローバル・ヒストリー研究の挑戦. 水島　司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社，2-32.

水島　司(2010).『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社.

水島　司(2016). 序　環境に挑む歴史学. 水島　司編『環境に挑む歴史学』勉誠出版，i-iv.

モデルスキー，G.（浦野起央・信夫隆司訳）(1991).『世界システムの動態：世界政治の長期サイクル』晃洋書房.

モリッシー，J. ほか（上杉和央監訳）(2017).『近現代の空間を読み解く』古今書院.

山下範久(2008). 世界システム論からグローバル・ヒストリーへ. 水島　司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社，77-90.

山下範久(2016). 世界システム論. 秋田　茂他編著『「世界史」の世界史』ミネルヴァ書房，345-367.

吉田雄介(2017). イランにおける大都市の長期的な地理的変化：Chandler の歴史的センサスを利用するための思索. イラン研究，**13**, 188-215.

Algaze, G.(1993). *The Uruk world system : The dynamics of expansion of early Mesopotamian civilization.* University of Chicago Press.

Amin, S.(2011). *Global history : A view from the South.* Pambazuka Press.

Beaujard, P.(2010) From three possible Iron-Age world-systems to a single Afro-Eurasian world-system. *Journal of World History,* **21**, 1-43.

Beckert, S. and Sachsenmaier, D.(2018). Introduction. In Beckert, S. and Sachsenmaier, D. eds. *Global History, globally : Research and practice around the World.* Bloomsbury USA Academic, 1-18.

de Blij, H. J. and Muller, P. O. and Nijman, J.(2013). The world today : Concepts and regions in geography. 6th ed., Wiley.

Bosworth, A.(1995). World cities and world economic cycles. In Stephen, K. S. ed. *Civilizations and world systems : Studying world-historical change.* Altamira Press, 206-227.

Bosworth, A.(2000). The evolution of the world-city system, 3000 BCE to AD 2000. In Denemark, R. A. *et al.* eds. *World system history : The social science of long-term change.* Routledge, 273-283.

Conrad, S.(2016) *What is global history?.* Princeton University Press.

Chase-Dunn, C. and Anderson, E. N.(2005). *The historical evolution of world-systems.* Palgrave Macmillan.

Chase-Dunn, C. and Hall, T. D. eds.(1991). *Core/periphery relations in precapitalist worlds.* Westview Press.

Chase-Dunn, C. and Hall, T. D.(1997). *Rise and demise : Comparing world-systems.* Westview Press.

Dear, M. J. and Flusty, S.(2002). Introduction : How to map a radical break. In Dear, M. J. and Flusty, S. eds.. *The spaces of postmodernity : Readings in human geography.* Blackwell Publishers.

Flint, C.(2010). Geographic perspectives on world-systems theory. In, Denemark, R. A. ed. *The international studies encyclopedia.* Wiley-Blackwell, 2828-2845.

Flint, C.(2017). *Introduction to geopolitics.* 3rd ed., Routledge.

Flint, C. and Shelley, F. M.(1996). Structure, agency, and context : The contributions of Geography to world-systems analysis. *Sociological Inquiry,* **66**(4), 496-508.

Frank, A. G. and Gills, B. K., eds.(1993). *The World System : Five hundred years or five thousand?.* Routledge.

Frank, A. G. and Gills, B. K.(2000). "The five thousand year world system in theory and praxis", In Denemark, R.

A. *et al.* eds. *World system history : The social science of long-term change.* Routledge, 3-23.

Gibson-Graham, J. K.(2006a). *The end of capitalism (as we knew it) : A feminist critique of political economy.* University of Minnesota Pres.

Gibson-Graham, J. K.(2006b). *A postcapitalist politics.* University of Minnesota Press, 2006.

Gills, B. K. and Thompson, W. R. eds.(2006). *Globalization and global history.* Routledge.

Hall, T. D. and Kardulias, P. N., and Chase-Dunn, C.(2011). World-systems analysis and archaeology : Continuing the dialogue. *Journal of Archaeological Research,* **19**(3), 233-279.

Haneda M. (translated by Noda Makito)(2018). *Toward creation of a new world history.* Japan Publishing Industry Foundation for Culture.

Hughes-Warrigton, M.(2015). Writing world history. In Christian, D. ed. *Introducing world history, to 10,000 BCE.* Cambridge University Press, 41-55.

Manning, P. ed.(2005) *World history : global and local interactions.* Markus Wiener.

Manning, P. and Gills, B. K. eds.(2011). *Andre Gunder Frank and global development : Visions, remembrances and explorations.* Routledge.

Morrissey, J. et al.(2014). *Key concepts in historical geography.* SAGE.

Murray, W. E.(2006). *Geographies of globalization.* Routledge.

Knox, P. L. and Marston, S. A.(1998). *Places and regions in global context : Human geography.* Prentice Hall.

Pomeranz, K.(2018). Scale, scope and scholarship ; Regional practices and global economic histories. In Beckert, S. and Sachsenmaier, D., eds. *Global history, globally : Research and practice around the world.* Bloomsbury USA Academic, 163-194.

Sachsenmaier, D.(2015). The evolution of world histories. In Christian, D., ed. *Introducing world history, to 10,000 BCE.* Cambridge University Press. 56-83.

Schneider, J.(1991). Was there a precapitalist world-system?. In Chase-Dunn, C. and Hall, T. D. eds. *Core/periphery relations in precapitalist worlds.* Westview Press. 45-66.

Stremlin, B.(2008). The Iron Age world-system. *History Compass,* **6**, 969-999.

Taylor, P. J.(2003). Global, national and local. *A century of British geography.* In Johnston, R. and Williams, M., eds. Oxford University Press, 347-368.

Taylor, P. J.(2004). *World city network : A global urban analysis.* Routledge.

Wallerstein, I.(1978). Civilizations and modes of production : Conflicts and convergences. *Theory and Society,* **5**(1), 1-10.

Wallerstein, I.(2011). Foreword. In Manning, P. and Gills, B. K. eds. *Andre Gunder Frank and global development : Visions, remembrances and explorations.* Routledge, xiv-xx.

Wilkinson, D.(2000). Civilization, world systems and hegemonies. In Denemark, R. A. *et al.,* eds. *World system history : The social science of long-term change.* Routledge, 4-84.

An Ordering Time-spatial Frame of Ways of Knowing the World in World-system Theory, Global History and World History

YOSHIDA Yusuke*

Over the last few decades we have witnessed the remarkable development of global history or world history research which have taken inspiration from Immanuel Wallerstein's modern world-system theory. The notion of "space" or "region" has become an influential universal principle in the field of recent global history and world history and scholars of these academic disiplines have often advanced an interpretation of space and region and used the language of space. It is obvious that it is the influences of spatial turn or spatial revolution in human and social sciences. But the use of the terms relating space and region as it has been applied by recent historians to the cases of global history and world history has several problems. So, we review recent developments in world-system theory, global history and world history to identify their use and interpretation of the language of space.

Key words : world-system theory, global history, world history, space, region, spatial turn

*Part-time Lecturer of Kobe Gakuin University E-mail : sharare@human.kobegakuin.ac.jp